

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2010年3月

## 博士学位申請論文審査報告書

論文題目：ボランティアによる地域日本語活動の改善と発展に向けた研究  
- 素材集を媒介とした試みからの考察 -

申請者氏名：遠藤 知佐（エンドウ チサ）

主査 宮崎 里司（大学院日本語教育研究科教授）

副査 川上 郁雄（大学院日本語教育研究科教授）

副査 池上摩希子（大学院日本語教育研究科准教授）

本研究のフレームワークは、関東にある地方都市・W市関連の国際交流協会（以下、協会W）において、申請者が、約2年3ヶ月にわたってフィールドワークを行なった地域日本語活動が基本となっている。そこでの地域日本語活動の参加者（日本語ボランティアおよび非母語話者参加者）による学びの様相を、モジュール形式「生活行動シラバス+交流の話題・タスク」でと編集された、「素材集」という媒介物を置くことで描き出し、実践現場でその作成目的が達成されたかを検証目的としている。さらに、ボランティアと申請者とが素材集を協働で作成した過程から、メタ活動として教材（素材集）作成過程も研修対象としている。それにより、地域日本語活動を相互学習の場へと転換し、それを通して多文化共生社会づくりをめざした実践方法の検討が提起されている。論究する内容は、素材集の有効性に関する検証だけでなく、活動に参加する外国人やボランティアの活動実態について包括的な調査を実施し、活動改善に向けた検討を試行している点に特徴があり、動態性のある日本語教育の実践現場から立ち上げた研究と言える。以下、各章ごとの内容を概略する。

第1章では、本稿の概要、研究経緯と申請者の立場、用語・概念説明を含めた研究背景、および活動用素材集の提案が試みられている。具体的には、ボランティア活動として外国人への支援を行いながら、相互学習が促進され、多文化共生社会作りに向けて参加者の創造性や主体性が発揮される活動の可能性について考察されている。提案した素材集について、活動の場で作成目的が達成されたかの調査が、詳しくデザインされている。また、申請者自身が一人のボランティアとして参加したボランティアとの協働による素材集作成過程が詳述されている。それに基づき、(1)活動に素材集を媒介させることによる、日頃の活動の変化、(2)素材集の作成を通して、ボランティア活動への理解が深まるとする、二つの仮説の検証を試みている。同時に、活動自体と、主に学びの観点から見た外国人参加者とボランティアの内実を明らかにし、活動の改善と発展に向けた知見を得ることも目的としている。

第2章では、地域日本語活動における、ボランティアと外国人参加者との相互学習を通して、多文化共生社会の創造へ寄与するという理念が広まりながらも、日本語を教え込む活動になりがちな先行研究の課題が取り上げられている。その上で、実践提案や活動の内実、

地域日本語活動の参加者を理解する研究のアプローチが十分ではなく、現段階では、多文化共生社会を目指すという理念と活動実態との乖離が指摘されている。そして、行政とは異なる市民レベルという切り口から、多文化共生社会の実現に向けた外国人と日本人の相互学習は、依然、役割の固定化が見られると批判し、結果的に均質性を求める同化意識の強い活動に終始している現状と、一方で、そうした活動の問題を改善するための実践提案自体が不十分である点も指摘されている。本研究では、こうした研究課題を明らかにし、参加者の活動実態を丹念に描き出しながら、実態とそれに影響を与えている要因についても示そうと試みている。

第3章では、本研究全体の理論的枠組みとして、社会的実践として活動を改善するための活動理論である、エンゲストロームの活動理論と、社会文化的アプローチに属する、レイヴとウェンガーの正統的周辺参加論(LPP)を主軸にし、地域日本語活動で、具体的に何を学んでいるかを検証するための個別の枠組みとして、外国人参加者の第二言語習得過程を理解するための、意味交渉や、ボランティアの学びを理解する上で有効な、生涯学習論及びボランティア論の知見を、複合的に援用している。

第4章の「外国人の生活行動上の支援と相互学習を主目的とした素材集の提案」では、人権の実現を重視した、公共サービスの活用、就労、教育場面などといった、13の生活場面を採り入れ、外国人参加者の問題の顕在化と当事者性を発揮するためのモジュール形式や、自律的学習を促進するための社会的戦略、および学習リソースへのアクセス紹介などといった特徴を備えた素材集の提案がなされている。加えて、本研究の対象とする、フィールドワークによる調査、および6章で進める素材集の分析と検証を行う上での研究方法、ならびに、7章で扱うボランティアとの素材集作成過程が詳述されている。

第5章「研究方法」では素材集の内容について提案がなされている。先行研究における外国人参加者およびボランティア要因から、素材集を提案し、その内容について述べ、活動に必要とされる教材とはどのようなものが、生活者である外国人にとっての日本語習得と市民による支援可能な項目の接点、また、活動を媒介する教材とは何かについて考察が加えられている。

本研究では、動態性のある日本語教育実践現場を検証するために、必然的に、多様な視点から調査がなされている。具体的には、素材集を使った活動場面においては、素材集所持者への質問紙調査、素材集を使用している小グループの縦断的参与観察、外国人参加者へのインタビュー、その他 - 月例ミーティング・ボランティア昼食会・交流会等の観察記録、インタビュー協力者の協会W申し込み時記録と担当ボランティアからのインフォーマルな聞き取り・活動記録入手等によるデータ収集が採用された。また、ボランティアが参加する素材集作成過程を調査では、ノート記述、印刷物や保存データ、メンバーへの質問紙調査、作成後のメンバー、事務局員、行政担当者へのインタビューなどが収集された。このように、地域における日本語教育の実践に、長期的に関わり、その過程で、さまざまなデータ収集を試み、地域における実践のあり様を、多角的、多層的に捉えようとしている点が、本研究の大きな特徴であると言える。

第6章と第7章は、フィールドワークによって得られた調査対象者のデータ分析に加え、素材集の検証及び活動実態理解のためのリサーチクエスチョンが提案され、それに即した分析が試みられている。その結果、第6章では、素材集が外国人参加者への生活行動支援と参加者間の交流に役立ち、活動のプラットフォームとしての素材集の役割が明らかになり、小グループ活動の縦断的参与観察を通して、生活行動支援と交流がほぼ交互に生起し、活動の実際と実践者としてのボランティアの学びが検証された。また、自由な話題提供が可能な外国人参加者の学びを、ミクロ的観点からの意味交渉と、マクロ的なLPPの枠組みからできたことで、参加者の日本語習得過程を総合的に把握することができ、学びの諸相が立体的なものとなっている。その結果、活動に素材集を媒介させることによって日頃の活動が変容するという仮説が実証されている。

また、7章では、ボランティアと日本語教育関係者との教材作成過程、およびその意義、ボランティアとの協働による素材集作成の過程の実態、ボランティアが素材集作成に参加する意義、作成における問題点などが言及されている。しかしながら、素材集作成を通して、ボランティアの活動への理解が深まるのではないかという仮説については、各自が持っている、経験が剛構造になって、行動面では変容が見られないことも明らかになった。

最終章の第8章では、これらの結果を整理し統合した上で、活動の改善と発展の観点か

ら考察するとともに、研究方法および内容に関わる課題についても検証されている。そして、活動を改善・発展させていく上で、その取り組みへのボランティアの参画、専門知識を持つ者の協働、適切な道具の媒介、さらに、日常の活動場面と、そのためのメタ活動の有機的結合を求めることが重要であると強調している。そうした日常の活動とメタ活動の往還が積み重ねられることによって、第6章・第7章で課題となった、成人の学びの特質である各自の経験を背景とした剛構造が徐々に変容し、活動改善につながる可能性が提起された。そうした協会Wの活動改善と発展への試みを左の図8-3(p.208)で図示し、

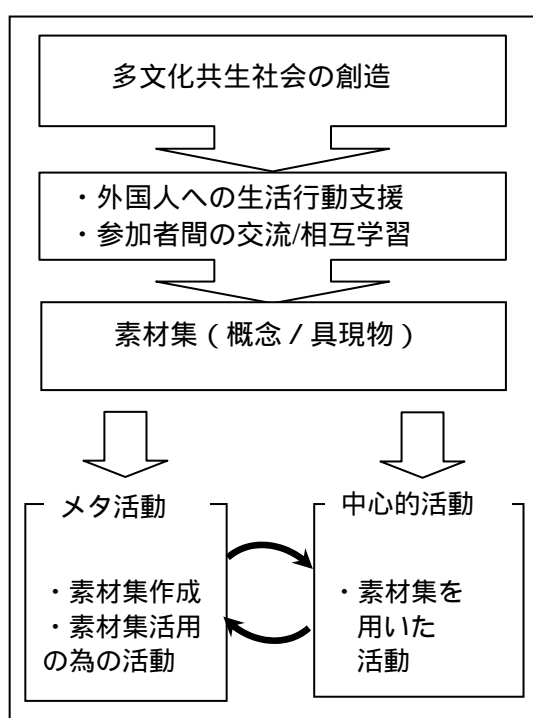


図 8-3 協会Wの活動改善と発展への試み

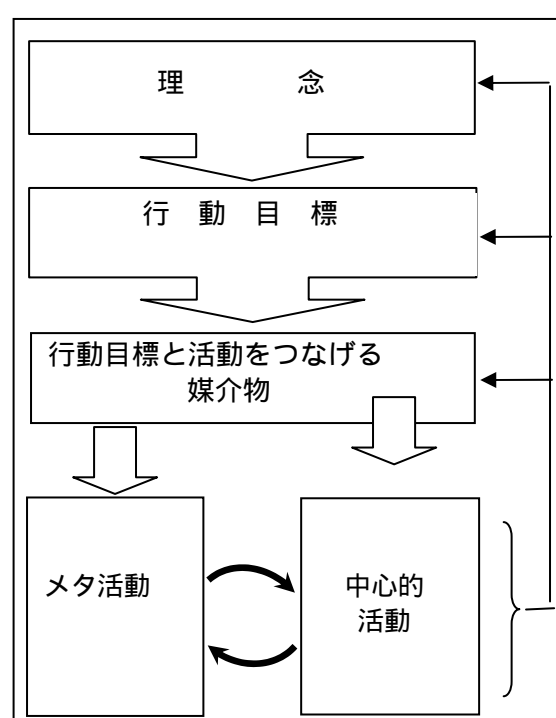


図 8-4 活動改善と発展に向けたモデル

活動の改善・発展に向けたモデル(図8-4 p.208)を提示することにより、ボランティア自身が、改善と発展のうえで欠かせないアクターであることが証左されている。本研究では、素材集は、活動のプラットフォームとなっており、維持する基盤となる、各自に行動目標を思い起こさせる、各自に行動目標を反映した実践を可能にさせる、といった活動における媒介物の意義が確認された。

本研究で展開されている実践研究は、申請者が実践団体の活動に参加し、ある時は、ひと

りの実践者として、またあるときは専門家として関わりながら、観察や助言をする中で、その実践から見える普遍的な実践方法論を析出するという新しいアプローチを試みている。その過程は、極めて動的であると言える。実践活動団体自体が流動的で、かつ、そこに参加している申請者自身も方向性を模索しながら関わらざるを得なかったためである。また外国人参加者も多様な背景を持っており、その参加者と実践者とのやりとりを分析した結果、相互影響的であり、かつ流動的であることが判明した。そのような研究は、本質的に実践者だけではなく、そこに関わる申請者の働きかけや、実践者とのやりとりも動的にならざるを得なかった。その結果、フィールドも参加者も、また申請者自身も変容を重ねながら、地域日本語活動を継続することによって、フィールドをも豊かにすることをめざし、研究に資する知見をフィールドから得ようと試みている点は高く評価できる。つまり、本研究は、そのような実践自体が本来持っている動態性に真摯に向き合って、実践に関わる複数のアクターたちの動的な関係性に焦点を当て、実践を考察しようとした実践研究と評価できる。それは、固定的な教科書ベースの授業プログラムを実践のコアにする多くの日本語教育の実践の場とは対極にある実践研究的アプローチであり、動態性の日本語教育実践研究と認められる。その意味で、本論文は、21世紀型の日本語教育実践研究のモデルを強く示唆する研究として高く評価できる。

本論文の中心的な研究テーマは、ボランティア団体に参加する実践者の変容、またその実践者と外国人参加者とのやりとりの分析から、実践の動態性と実践者自身の学び、および実践者と外国人参加者の双方の視点から「学び」を捉えようとしている。その結果、外国人参加者がどのようなニーズを持っているのか、またどのようにことばを学ぶのかについて、実践者の気づきが明らかになると同時に、それを可能にした素材集の役割と意義についても析出することができた。その意味でも、地域における日本語教育の現場の「学び」とはどのようなものなのか、またその「学び」を創出するために必要なものは何かを明らかにした点は評価できる。

ただし、今後の発展研究課題とすべき点も指摘された。本研究は、「素材集を媒介とする」というテーマ性が含有されているが、そのような素材集とはどのような条件によって生まれるものなのか。「媒介」したあとの状態はどのような状態なのか。媒介することが目的ではなく、その媒介された後の状態こそ、さらに詳しく分析し、深く議論することが求めら

れるのではないだろうか。また、「十全的参加」は決して日本語母語話者を到達目標にしていないというが、その意味の議論が不足していたと判断できる。

その素材集を開発しつつ実践で使用するという一連の実践を、日本語教育学という文脈で捉えると、どのような意味があるのかについても、さらに深い議論とそこから導かれる示唆があってしかるべきであったが、教科書を使わなくても「学び」が起こるという、やや情緒的な結論になっている点が惜まれる。次に、論文の中でも述べられているように、素材集という「道具」は、実践共同体の中に提示しただけでは機能することはない。活動理論を応用し、実際に活動改善に携わっていく中で、「道具」が活動に構造的変化を与えることをより深く考察できたのではないかという疑問がある。今後、どのような「道具」をどのように提示すべきかを考慮しながら、活動の改善と発展を視野に入れた研究が望まれる。

以上、今後の研究遂行力を醸成させる上で、説得性をもった展開力やダイナミックな提言に期待したい点も認められるものの、論文の全体的な一貫性や整合性、論究力や分析力、またそれらをプレゼンテーションする記述力については、高い完成度が見られる。さらに、動態性に基づいた、従来にない多様、多層な研究方法を採用した実態調査を試み、地域日本語活動における問題点を解明した点、併せて、今後の教育実践を展開する、申請者の日本語教育観が明示的に示された点を、総合的に評価し、当該論文を、博士論文に値するものと判定する次第である。